

文学概論

猪野 謙二
編

College Books



有 信 堂

文学概論

猪 野 謙 二
編

College Books

有 信 堂

文 学 概 論 ガレッジ プラックス

¥ 650

1969年1月20日 初版第1刷発行

1970年5月30日 初版第2刷発行

編 者 猪 野 謙 二

発行者 増 永 勇 二

印刷 三 暢 印 刷 製本 黒田製本

東京都文京区本郷5丁目30-20(東大前)

電話(03)813-4511(代)・振替東京141750

(郵便番号113-91)

発行所 有 信 堂

京都支店 京都市左京区百万遍(京大北門前)

電話(075)781-3652・振替京都23523

(郵便番号606)

1390-000572-8607

はしがき

数多い文学史書の類とは別に、それと並んで、文学に就いての基礎的な諸事項を理論的に扱った、概論ふうな本が待望されている。だが従来のそういう概論書では、文学のとらえかたが観念的に過ぎたり、あるいは外国の理論のたんなる啓蒙的介绍に終っていたりするものが多く、実際にその役に立っているものはきわめてすくない。そこで本書は、世界文学的な視野をもちながらも、なお日本の文学（必ずしもいわゆる「国文学」という意味ではない）を中心とする現代的な問題意識の上にたち、たとえば大学の教養課程の教室などでも役立つようなかたちで、ひろく文学入門の書としての役割りを果たしたいと思う。その意味で、叙述はなるべく具体的かつオーソドックスなゆきかたに従い、既往の定説などにも触れながら、なおできるだけ自由に執筆者の考えをうち出すようにつとめたい。

本書はだいたい以上のような趣旨を掲げて、編者の信頼する一七人の筆者たちにそれぞれの項目の執筆を願ったものであるが、できあがった本のはしがきとしては、なおこれに若干の註釈が必要であらう。

まず第一に、いま「役立つ」とか「役立たない」とかいう言葉をあえて使ったが、この役立つとはいったいどういうことなのか。率直に言って私は、一般にこういう本が、文学の創作はもとよりその鑑賞にも研究にも、文字通りのいわば卑近な意味で役立つなどということはあまりない、という感じをもっている。のみならず、その本がいわゆる教科書ふうに扱われて、もしも読者が、小説とはこういうものだとか、批評とはこういうものだとかいうこ

とを、紋切型にその概論ふうな叙述の枠の中でしか考えないようになったとしたら、それこそ百害あって一利なしということになってしまいうだろう。

そしてこのことは、いちおう、本そのものの実力を越えた、文学あるいは文学勉強それ自体の本質にかかわっているものなのだ。あえていえば、文学とはこういうものだということがわかってしまったとしたら、われわれはもう文学勉強をつづける必要も情熱もなくなってしまうだろう。文学とはこういうものだということは、われわれの一人一人が、直接多くの作品に接することをはじめ、さまざまの具体的な文学体験を通じて、みずから刻苦して行き着くべき最終の到達点でこそあれ、あらかじめ心得ておかねばならぬ予備知識とか前提とかいったものでは決してないのである。

このことには本書中の拙稿でも触れているので就いてみられたいが、といっても私は、文学については基礎的な理論などというものはあまり重要でない、などといっているのでは決してない。そういう人も多いが、私にはむしろ反対に、理論的な思考を軽んずる文学勉強は決定的に大きな限界をもっている、としか思われない。ただその場合に、いま述べたような、いわば文学理論のもつ即自的な意義とか相対的な性質とかいったものをあらかじめ十分にのみこんでかからなければ、それは基礎的な理論としてもおそらく役には立たぬ、ということを強調しておきたいのである。

要するに、われわれの一人一人が、他からのおしつけや借り物ではない、あくまでも自分の文学理論をもたねばならないのであって、このおそらくは遠い目標に一步でも近づくために、実にそのためにこそ、既往のすぐれた文学者や文学研究者たちの考えが呼び出され、それらの土台に横たわっている共通の理論的な諸問題もあきらかにさ

れなければならぬということなのだ。また事実、それらの有効な助けなしには、どんなに僅かな独創もあり得ないというのが、とりわけ文学とか文学勉強とかいうものの、もう一つの側面における真実なのである。

もしもこの本が役に立つとするならば、それはひとえにいま述べたような範囲とその意味とにおいてにほかならない。どうかここに、さまざまの文学概念の手取早い概括や、あれこれの文学知識の集積をのみ期待されることのないように。

以上言わでもの自明なことをあえて記したが、私が達ての勧めに従ってこの本の編集を引き受け、諸氏に執筆を依頼してからすでに一年余りが経過している。その間三人のかたが外国出張その他余儀ない事情のために中途から脱けられ、その項目については出版社を通じて急遽かわりのかたを煩わすことになった。万障を繰り合わせて快くご協力下さった執筆者諸氏に対して、ここに厚くお礼を申しあげたい。

一九六八年一〇月

目次

文学の本質

猪野 謙二

芸術と文学

祖父江 昭二

一 芸術と文学の関係

「芸術と文学」というテーマのもつ問題(三) 芸術と文学の関係

I—ヘーゲルの場合(三四) 芸術と文学の関係 II—「文学・芸術」

という言い方(三五) 感性的認識の学としての美学と文学(三五)

二 技術との関連からみた芸術と文学

芸術と技術(二七) 文学(小説)と技術(二八) 文学(詩)創造と

技術(二九)

三 言語芸術としての文学と芸術

言語芸術としての文学と芸術……………三

言語芸術と文学——一、二の注意点(三) 言語と芸術(三) 理
性(悟性)と感性という枠組(三)

四	言語と論理学	三九
---	--------	----

人間における言語活動と論理学(三九) 論理学でない論理学(三九)
 アリストテレスの示唆(三六) 参考文献(三八)

文芸思潮

磯貝英夫

一	文芸思潮概論	三九
---	--------	----

文芸思潮とは(三九) 世界の文芸思潮(四〇) 文芸思潮の意識(四三)

二	主要文芸思潮の展望	四四
---	-----------	----

古典主義(四四) 浪漫主義(四六) 写実主義・自然主義(四八) 象
 徴主義(五一) その他の文芸思潮(五三) 参考文献(五五)

文学のジャンル

長谷川 泉

一	ジャンルの概念	五七
---	---------	----

元来は博物学の用語(五七) プリユンティエールの転用(五八) エ
 ルネスト・ボヴェの三大ジャンル説とコーヘンの四ジャンル説(五九)
 土居光知の四分法の展開説(六〇) モウルトンの文学形態の基本構
 造(六一) 土居・岡崎論争や、その他ジャンル論争(六三)

二	様式	六四
---	----	----

文化領域に用いられる様式(六四) 自然科学的態度との類似的分類
 (六六)

三	ジャンルのもつ様式	六七
---	-----------	----

詩

四 ジャーナルの発展……………七〇

ジャーナルと様式との関連(六七) ジャーナルの様式の三つの契機(六八)
ジャーナルを排してすべて様式と考える説(六八)

文学それ自体の機構からの考察(七〇) 人間主体の変革を前提とし
て(七〇) 異質なものを含みつつの隆替(七一) 参考文献(七二)

分銅停作

一 詩の本質……………七三

詩とは何か(七三) 詩的精神と散文精神の違い(七五) 詩の叙情性
と思想性(七七)

二 日本近代詩の展開……………七九

明治の新体詩運動(I)(七九) 明治の新体詩運動(II)(八二)
大正の近代詩運動(八三) 昭和の現代詩運動(八六) 参考文献(八九)

小説

草部 典一

一 小説の意味と歴史……………九二

小説とはなにか(九二) 小説ということば(九三) 近代小説の発生
(九四) 近代小説の成立と発展(九五)

二 小説の特質……………九六

散文と虚構(九六) 小説の要素(九八) 長篇小説と短篇小説(九九)

三	日本近代における小説と小説論の成立	100
---	-------------------	-----

『小説神髓』と『当世書生気質』(100) 『小説総論』と『浮雲』
(101) 小説史と小説論の課題(104) 参考文献(106)

戯曲

一	演劇と戯曲	107
---	-------	-----

戯曲の性格のとらえ難さ(107) 演劇における戯曲(107)

二	劇的なもの	110
---	-------	-----

戯曲の制約(110) 行動の模倣(111)

三	戯曲の構造	113
---	-------	-----

完全な行動の模倣(113) 急転と発見(114) カタルシス
(115) 生の根源的矛盾(116)

四	今日の課題	118
---	-------	-----

近代と現代(118) 日本の問題(119) 参考文献(120)

評論

一	文学のジャンルとしての評論	121
---	---------------	-----

評論というもの(121) 文学のジャンルとしての評論(123)
近代の文学評論(123)

二	日本近代における文学評論	125
---	--------------	-----

近代初期の文学評論(二三五) 外国の文芸思想に触発される文学評論(二七)

三 文学評論の姿と役割.....二六

さまざまな役割をする文学評論(二三六) 自己表現としての文学評論(二三) 文学評論と実作家(二三) 参考文献(二三)

記録文学 小島 輝 正

一 記録文学の特質と意義.....二五

記録文学とはなにか(二三五) 「事実」とはなにか(二三六) 「書く」とはどういうことか(二三六) 記録文学とフィクション(二三九) 記録文学の現代的意義(四〇)

二 事実と虚構.....二四

事実性と虚構性(四二) 事実性の意味の変遷(四三)

三 ルポルタージュとドキュメンタリー.....二四

ルポルタージュ、ドキュメンタリー(四三) 両者の相違(四五) 実例としての作品(四七) 参考文献(四八)

鑑賞 岡田 英雄

一 鑑賞とはなにか.....二九

鑑賞の定義(四九) 鑑賞の目的(五〇) 鑑賞の態度(五一)

二 鑑賞の方法とその深化……………一五四

追体験(一五四) 散文と詩のことば(一五五) 人物描写の鑑賞(一五六)

構成の吟味(一五七) イメージの把握(一五九) リズムの感応(一六〇)

主題の確認(一六一) 鑑賞の深化(一六二) 参考文献(一六三)

批評……………三枝 康 高

一 批評の立場と方法……………一六五

批評と評論の相違(一六五) 『詩学』の綱領とその権威(一六六) サ

ント・ブーヴ以後の批評(一六七) マルクス主義と実存主義(一六九)

二 批評としての構造分析……………一七〇

文学における形象の根拠(一七〇) 小説の構造とその本質(一七三)

主人公の三つのタイプ(一七五) 創作における批評的性格(一七七)

参考文献(一七八)

研究……………益 田 勝 実

一 問題の横たわり方……………一七九

二 わが国における文学研究の成長……………一八二

初期の状況(一八二) 実作者の理論(一八三) 研究の独立(一八四)

文学のつかみ直しと新たな苦悶(一八六)

三 方法統合の課題……………一八九

細分化の統合(一八九) 文献批判のあり方(一九〇) 解釈に必要な

歴史性の繰りこみ(一九三) 作者の想像力・造語力の研究(一九三)

文学史

相馬庸郎

一 文学史の問題性……………一九五

文学史の困惑(一九五) 文芸評論家と文学史家(一九六)

二 文学史と隣接する学問領域……………一九六

文学史と文献学(一九六) 文学史と歴史学(一九七) 文学史と精神史・思想史(一九七) 文学史と文芸学(一九八)

三 文学史学の状況と課題……………二〇五

文学史のひとつの季節(二〇五) 真の文学史学への期待(二〇六) 参考文献(二一〇)

文 体

杉山康彦

一 文体論の歴史……………二二一

修辭学と文体論(二二二) 昭和初年と戦後の文体論(二二三)

二 文体の特質……………二二五

文体とは価値であり、自己と世界との関係の独自性である(二二三) 泡鳴の一元描写論と文体(二二四) サルトルの小説論と文体(二二六)

三 文体と思想……………二三〇

平家物語の文体と思想(二三〇) 文体における普遍性と独自性(二三一)

映像

羽 仁 進

一 映像とはなにか……………三三

映像の定義(三三) 光学的映像(三七) カメラの眼(三八)

二 映像表現の方法と特質……………三〇

映像と音声(三三) 映像と時間(三三) 映像と意識(三四)
記録と想像(三五) 映像の享受(三七)

大衆文学

尾 崎 秀 樹

一 大衆文学の成立……………三九

大衆文学の誕生とその特徴(三九) 大衆文学と国民文学(四一)

二 大衆文学の伝統……………三四

大衆の話芸伝統(三四) 庶民的伝統と近代文学(四四) 大衆概
念(四五)

三 大衆文学の歴史……………四七

第一期(四七) 第二期(四八) 第三期(四九) 第四期(五〇)
大衆文学の方向(五一) 参考文献(五一)

文学教育

大 河 原 忠 蔵

一 文学教育の論争的性格……………三五

文学教育論の出发点(三三) 統制されていない現状(三五)

二	文学教育の平均的なとらえ方……………	二五
---	--------------------	----

ふみかためられた道(二五)	平均的なとらえ方の特徴(二五)
---------------	-----------------

三	文学教育と限界芸術……………	二五
---	----------------	----

作品埋没の危険(二五)	身のまわりを文学的にとらえる(二六)
限界芸術の考え方と状況認識(二六)	文学教育の一つのとらえ方(二六)
参考文献(二六)	

出版・ジャーナリズム

利根川 裕

一	マス・コミュニケーションの世紀……………	二七
---	----------------------	----

情報産業の社会(二七)	マス・コミの特性(二八)
-------------	--------------

二	マス・コミのなかの出版……………	二七
---	------------------	----

映像文化と活字文化(二七)	大衆社会への適応(二七)
---------------	--------------

三	出版ジャーナリズムの実態……………	二七
---	-------------------	----

マス・セール(二七)	ベスト・セラー(二七)
------------	-------------

四	マス・コミのなかの文学……………	二七
---	------------------	----

純文学と中間小説(二七)	批評的特性の自覚(二八)	参考文献
(二八)		

本書執筆者紹介

文学 概論

